

秋のリサイクル講習会 2コースとも順調なスタート

「生ごみリサイクル講習会」秋期講座は、9月30日(土)葛西健康サポートセンターおよび、10月5日(木)グリーンパレスで、それぞれ第1回講座が始まった。葛西会場はお天気も良く、暑いくらいだったにも拘らず、申し込み12名のところ10名の出席、しかも定刻の開始、と言う嬉しいスタート。主催者挨拶があり、少し緊張のうちに、生ごみ堆肥化概要のスライドが、優しい声の解説付きで始まる。

いよいよ料理教室風の講座が、調理台ならぬ生ごみ堆肥台を真ん中にして開始された。一つは、発泡スチロール箱を使ったもの。続いて、コンポスト容器を使って堆肥作りをするもの。

発泡スチロール箱方式は悪臭と虫の発生を封じ込める秘策の、ジッパー付きビニール袋を使い、生ごみを密閉して醗酵させる、いわゆる糠味噌方式(嫌気性発酵)がこの方法のコツ。これを併用すれば堆肥化も早い。

「生ごみをこれくらいに水切りして、米ぬかにまぶして、このジッパー付きビニール袋に入れます。そしてこのように空気を抜きます。これを袋がいっぱいになるまで続け、一週間程おきます。これで一次発酵しますので、あとは発泡スチロール箱に入れます。このとき、皆さんに差し上げた種堆肥を振り掛けて、良く掻き混ぜると、悪臭も、虫もつかずに二次発酵が進みます」こんな感じで、生ごみ堆肥作りの素材を、一つずつ、そのつど受講者に回覧し、理屈ではなく、目と鼻で感覚的に理解できるよう、ゆっくりと丁寧に説明は続く。

後半はコンポスト容器による講座だ。少しでも土地のある家庭向きで、慣れれば簡単で手軽な方法の堆肥作り。やはりポイントは生ごみの水切り。

「これが昨日のもので、水切りした生ごみです。こっちは、今朝の生ごみです。回しますから良く見て、水切り加減をしっかりと覚えてください」

「水切りはこのように、広告のチラシを利用するのも良いですね」



9月30日 西葛西健康サポートセンター会場

「容器の設置は水はけの良いところを選んで、5cmぐらい土に埋めて、周りを足でふみ固めてください。そうしないと夜、鼠が周りを引っ掻きますから」

と言った按配で、すべて実物の容器と材料を使っての説明は続く。どちらの方法にしても、微生物の働きを利用して、生ごみを堆肥にしているから、うっかりすると、夏場に悪臭と虫の発生に襲われる。

「夏場は気温と湿度が高いことと、西瓜などの果物が多くなる。だから生ごみの水切りが大事。それに虫を寄せつけないことです。それには、容器についている防虫ネットの上から、パンティ・ストッキングよりもさらに目の細かい布で、すっぽり被う他ありませんね！」

「何しろ、アメリカミズアブってというのは、細い卵管を布目を通して、2cmぐらい延ばし、卵をぱっぱと生ごみに向かって吐きかけるんだそうです。一度この幼虫に入られたら、ゾクッとしてしまう程です」

「悪臭は、果物など生ごみに水分が多く、気温が高いときに発生しますね。空気の好きな好気性発酵ではなく、嫌気性発酵になるからで、このときは米ぬかや、乾いた土を多く入れて、掻き混ぜてやると良いでしょう。土には微生物がたくさんいるんです。

それに、糠も土も水分を吸収してくれますからね」

こんな感じで、なぜそうなるのか、をできるだけ納得し易いように説明する。

受講者の多くは机から乗り出すようにして、積極的に質問や感想を述べていた。いつもは希望者の少な

いコンポスト容器が、半分もいると言う嬉しい講習会で、定刻の4時に終了した。

平日コース(グリーンパレス)

グリーンパレスの1回目は雨模様のお天気だったが、受講者の出足を心配することなく、定刻5分遅れで始まる。しかも申し込み18名中、15人の出席。

ここでも主催者挨拶で始まり、スライドで生ごみ堆肥作りの概要を勉強したあと、講座に入った。

「ごみの中から、こんな宝物！」と、ごみの中にあった種から収穫したものを手のひらにのせ、「私のハッピーは、手のかからない一番簡単な方法です」という名調子で始まる発泡スチロール箱方式は、講師の本業が伝わってくるような説得力のある内容だ。

葛西コースと違って、ジッパー付きビニール袋は使わないだけに、確かに簡単。ここでも水きりは欠かせない。水切りをした生ごみを、土と米ぬかを底に敷いた発泡スチロール箱にいきなり入れ、その上に種堆肥をばら撒くのを繰り返すという、いたって単純な方式。そのかわりジッパーを使わない分、堆肥になるのが遅くなるし、虫が入り易いかも知れない。しかし、江戸川区は働く人の街。簡単な方が良いはず。

マンションなどの集合住宅でもできるが、問題なのは悪臭の発生を確実に防ぐ方法を習得することだ。これが身につけば、生ごみを自在に操れ、微生物の



働きを十分に活かせることにつながる。(コンポスト容器方式は葛西と同じ省略)

グリーンパレスコースでも受講者の希望は、発泡とコンポスト容器とも半々だ。受講者から活発な質問があり、こちらは定刻を10分ほど過ぎて終了。

恐らく受講者の全員が生ごみを減らしたい、との思いだけではなく、野菜や草花を作って楽しみたい、との思いの方が強いような感じ。従って、3回目には生ごみ堆肥の使い方を含めた内容。2回目は受講者が作品(生ごみ堆肥中のもの)を持参し、実物をもとにみんなで善し悪しを勉強する予定。

この生ごみリサイクル講習会を、当クラブとして始めて3年目になる。何といても嬉しいことは、生ごみ堆肥を始めてから食材を買うのが計画的になった、家族が食べ残しをしなくなった、などの声を受講者から聞けることだ。

受講者の真剣な思いが伝わってくる一日が終わった。
(伊東 春海 記)

農業者との交流会(第2回)

「農業者との交流」お百姓さんに学ぶ、は9月16日(土)秋晴れのなかで行われた。

定刻に浅間神社前バス停に集合、総勢15人。早速、最初の先生、岩田米夫さん宅へうかがった。

丁度、青梅から仕入れた堆肥を、トラックから畑に下ろしていた。

『これから畑に堆肥を入れて、そら豆を蒔く準備をしているところですよ』『そら豆は、どやって蒔くのが知ってる?』

硬く小さく、カチカチになったそら豆のお歯黒のところを、親指で触りながら、『この胚芽のところを下に向



けて、ひと粒ずつ30センチ間隔で蒔くんだ』『ひと粒ずつ、手で、蒔くんですか』『そうです』

やっぱり、農業は大変だ、との思いがみんなの脳裏をよぎった。

岩田さんは父母から教えてもらうのは簡単だが、自分で勉強したいとの思いから、都の総合農林研究センターで研修し就農した。それだけに堆肥を使った有機農業の大切さと、難しさを乗り越えようとしていた。

トラックに載っている完熟した堆肥を手のひらに掴み、臭いを嗅ぎ、程よく湿った感触を確かめながら、岩田さんの堆肥にかける熱い思いを、強く感じたみんなである。

いつか私達の生ごみ堆肥が活かせることを念じ、岩田さん宅を辞去した。

セロリの伊藤農園



(セロリの写真はホームページから)

12時半には食事を済ませて待っている、と言う伊藤さんは細面のスラッとした長身のからだ。農業者とは思えない優しい感じが全身を包んでいた。戦後間もなくから、セロリを作るに至った経緯を、優しい語り口で説明してくれた。

野菜づくりに適した江戸川区の荒木田(あらかだ)土壌。それに大量の堆肥を投入。それを約50年間も続けてきた土壌は、ほかほかとした感じの土になっていた。

堆肥の効用は植物の生きやすい環境をつくることにある。それは土をほかほかにする他に、水持ちと水はけをも良くし、空気も通り易くする。それらを可能にする団粒化(だんりゅうか、土の粒を大きくする)を促進する働きが堆肥にはある。松葉がまだそのままの形で使っているのも、そのためだそうである。

私達は堆肥をできるだけ熟成させて、細かくした方が良いと思っていただけに、驚くばかり！。

『セロリの原産地は何処ですか』『地中海の暖からず、寒からずの地方です。だから、江戸川区辺りの気候では、9



ハウスで説明する伊藤さん

月に種を蒔き、3月～4月に収穫するのが良いのです』『あの味と、かおり。やはり旨さに感動してもらうことが重要なんです』

「セロリの伊藤農園」のホームページ(<http://www.itofarm.jp>)を開くと、目の前にいる伊藤さんが、大きく見事に育ったセロリを抱えアップで出てくる。

市販されているセロリで最もおいしい品種で、栽培を始めて48年になるが、現在まで40年間、日本一の評価が続いているという。

『今まで食べてたセロリは、いったい何だったの?』と思わず口をついたのである。『この品種は何ですか』

『コ・ネルと言う品種です。アメリカのコ・ネル大学で改良された種です』『家ではこのように独自で種を採っていますが、アメリカでは大量生産型品種になっているでしょう』

私達はこのように、徹底的にセロリの快適環境を目指し、世界的に評価されている

伊藤さんのような農業者が、江戸川区にいることに誇りを感じながら辞去した。そして緊張と感動の3時間は瞬間に終わったのである。



布ぞうりにはまっています

6月22日の定例会では、椅子とテーブルがたずけられ、いつもの例会とは違う雰囲気でも始められました。初めて見る木で出来た枠は、佐藤さんが廃材で手作りしたそうです。さあ布ぞうり作りの始まりです。頭と手はばらばらで、兎に角江原さん・佐藤さんがあっちゃこっちゃ飛び回り、皆も悪戦苦闘して、私はなんとかごまかして仕上げました。不思議なもので、裂いた布をキュッキュッと織り込んでゆくと立体的なグラデーションができ、世界にひとつしかない物が出来上がるのです。形は不揃いでも、みんなステキな出来栄です。

私は生ごみを物にするまで3年かかりました。ですから布ぞうりもマスターするのに、時間がかかるとは思いますが、「あー、日本人に生まれて良かった。」と実感しているところです。

中村富久子

“布ぞうりつくり講習会”盛況

(エコセンター後援)

この春からの約半年間で7回の講習会(エコセンター後援分)に、のべ200名を超える方々が古布持参で参加しました。何よりうれしいことは、使い捨て時代に育った若い方の参加が増えてきていることです。

私がこの講習を思い立ったのは、当クラブ会員の一人が発した“布ごみをどうしよう”

という一言からです。事実、日本の工場群がアジア地域に移るにつれて、国内でのウエス

(ぼろ布)の需要は激減しました。えどがわエコセンター主催の第1回目の講習会には、当クラブから5名も参加しました。

平井 公子

当クラブでは、佐藤代表の手作りの台を含めて、ぞうり編みの台が10台ほどあり、会員の方に買出しています。作り方も先日の講習会で使った説明をこのページのウラに印刷してあります。ぜひ皆さんも挑戦してみてください。不明な点は、江原、佐藤までお問合せください。



いきごみクラブ忘年会のお知らせ

12月15日(金)17時から

小松川市民ファームにて

参加費はいただきません

(できれば一品持ち寄りください)

ご飯ものと鍋物は、佐藤・江原で作ります。皆様、ご都合をあわせてお集まり下さい。

参加の可否を前日までご連絡ください。

(当日突然参加もOK!!です。)

♥♥♥楽しい会にしましょう♥♥♥



10.8 区民祭りに出展しました